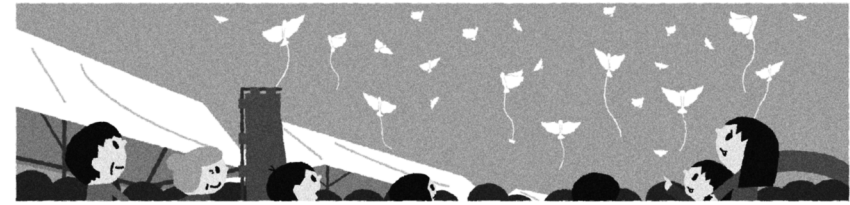


# 福幸への願いを込めた新しいまちの旅立ち

宮城県東松島市・野蒜北部丘陵地区震災復興事業(2012年◆平成24年~)



仙台駅から、J R仙石東北ライン快速に乗って約30分。右手に松島、奥松島の美しい風景が見えてくると、まもなくJ R野蒜駅に着する。駅前に降り立つと、目の前に広がるのが、東日本大震災被災地中最大規模の高台移転地、野蒜ヶ丘(野蒜北部丘陵地区)だ。

去る11月20日、この駅前広場で「ひがしまつしま福幸まつり」が開かれた。この日、野蒜ヶ丘では、造成した278区画の宅地のうち、最後の92区画の引き渡し完了。同時に、市民交流や観光の核となる野蒜市民センターと奥松島観光物産交流センターもオープンした。これにより、東松島市では7つの集団移転地で計画した717区画の宅地すべての引き渡しが終り、防災集団移転促進事業の宅地整備が完了したこととなる。「ひがしまつしま福幸まつり」は、それらを祝って開かれたものだ。

会場では、蒸し牡蠣やだまこ汁、樽酒などがふるまわれたほか、この地に来年移転する宮野森小の子供たちによる「ふるさと宮野森太鼓」なども披露。地元物産の販売などをする71ものテントが立ち

並び、新たなまちの誕生を祝う多くの人の笑顔があふれた。

真新しい野蒜市民センターで開かれた宅地引き渡し式で、阿部秀保東松島市長は、「この野蒜北部丘陵団地を高台移転のモデルとして、共助のまちづくりをしていきたい。復興のシンボルは人であり心。みなさんとともに夢を持って進んでいきたい」と晴れやかな顔で挨拶。東松島市議会の滝健一議長も「野蒜のいいところは地域のつながり、地域力。一人ひとりが主役になって、すばらしいまちに発展してほしい」とスピーチした。それに応え、移転者代表の熱海治さんが「震災当時は、新しい住居に移るまで10年前後かかるのではと思っていました。正直、これからが大変な、大切なときだと考えますが、早く震災前と同様の生活ができるよう邁進していきたい」と述べると、目頭をおさえる列席者の姿も見られた。

## 山を切り拓きまち全体を移動

東松島市は、東日本大震災により市街地の約65%が浸水、多大な被害を受けた。なかでも野蒜地区

は被害が大きく、家屋や学校はもとより、海岸から500メートル以上離れたJ R仙石線の線路や野蒜駅など、まちの機能の多くが津波によって破壊された。

安全、安心なまちを、という願いのもと、市は地区にある山を削り、高台に移転することを決めた。東京ドーム約19個分(約90ヘクタール)におよぶ敷地を造成し、住宅のみでなく、被災した仙石線の線路や駅、学校や消防署といった公共施設など、まちの機能をまるごと移転する壮大な事業を行うことになったのだ。

未曾有の大事業を遂行するため、東松島市がパートナーとして選んだのが、UR都市機構だ。阪神・淡路大震災、新潟中越沖地震などの復興事業の実績を見込まれ、2012年3月に東松島市とURは「復興事業推進」の協力協



定を締結。以来、URは野蒜北部丘陵地区と東矢本駅北地区の復興市街地整備事業と災害公営住宅の整備を進めてきた。

UR都市機構東松島復興支援事務所の清水良祐所長は、当時を振り返る。

「容易でない工事ですが、とにかく一日も早くという思いでしたね。そのために、市には開発地区の土地を全面買収していただき、我々は設計施工を一括発注するCM方式を採用。工事をスピーディに進める環境を整えました」

ひがしまつしま福幸まつり。鏡開きで新たな門出を祝う。



総延長1.2キロメートルもの巨大ベルトコンベヤーで、一日に10トントラック1650台分の土砂を搬出。また、通常のダンプの

5倍の積載量がある50トンダンプや巨大パワーショベル、ブルドーザーも使用し、通常で3年以上かかるというわかれた搬出期間を、わずか10カ月に大幅短縮した。現在、ベルトコンベヤーを撤去した後のルートは道路に、仙石線と交差するトンネル状の空洞は駅への連絡通路に転用。新たなまちで、その面影を伝えている。

工事のコーディネーターなどを担当した、URの稲葉雅弘統括役は語る。「J R仙石線移設のため、造成工事が完成した部分から順次J Rさんに引き渡す形で工事を行いました。通常、まちは面で作っていくので、一部を完成させながら進めるのは安全管理面などでも難しいのですが、無事に今日を迎えられて、ホッとしています」

URの亀山隆市街地整備課長も「住民のみなさんがすぐく前向きで、公園の整備などにも積極的に意見をいただいた。その声に後押しされました」と語る。

## 新たなまちで繋がりを紡ぐ

野蒜ヶ丘では、昨年の5月に

J R仙石線が運転を再開、新たな野蒜駅と東名駅も開業された。今年の5月からは、宅地引き渡しが始まる。海を見下ろす高台では、待ちかねた人々が続々と家を建築中だ。既に開業された野蒜市民センターなどに続き、今後、保育所や商店、病院、福祉施設がオープン予定。来年1月からは、地元の木材を使った宮野森小学校新校舎での学校生活もスタート。そして、6、8月には170戸の災害公営住宅の入居が開始される予定で、約1400人が暮らす新しいまちが、いよいよ動き始める。

まちづくりには、住民の声も大きく反映されている。そのとりまじめに動いたのが、野蒜北部丘陵復興協議会の齊藤均会長だ。市の復興計画策定以来、仮設住宅を回って住民の意見を聞いた。

「仮設住宅で孤独死を絶対出さない、というのが、私の強い思いでした。そのため二日とあけずに懇談会を開き、500以上の要望を聞いてきたんです。そのすべてに、URの清水さんはつきあってくれて、どんな細かいことも聞いて応えてくれた。だからみんな

な、前向きに待つことができました。本当に頭が下がりますね」

齋藤剣一副会長も「道路1つ、電柱1本、手すり1つにまで、意見を聞いて考えてくれたし、地区のお祭りやイベントには必ず顔を出してね。それが信用に繋がると、話もスムーズにいくんだよね」と労をねぎらう。

2人とともに、まちづくりに奔走してきた「野蒜まちづくり協議会」の齋藤壽朗会長は語る。「この地区には、もともと先祖さんをお守りしたり、鎮守の森をおまつりする『結』という自治組織があるんです。そうした繋がりを大切に、新たに住む方も大事にしなから、新しいコミュニティの構築を進めていきたいですね」

UR都市機構  
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます  
[企画制作]新潮社